31.02.20

言語文化部会　平成３０年度の研究報告

言語文化部会 部長：揖斐川町立坂内中学校　清水　裕樹

１　今年度の研究の方向

中国研 研究主題

生きてはたらく言語能力の育成

～言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して～

《言語文化部会として目指す生徒の姿》
・社会生活において必要な国語の特質について理解し，それを適切に使う生徒
・国語の知識や技能を社会生活において様々な場面で主体的に活用する生徒
・古典の世界と，身近な生活とのつながりを感じ，古典に親しむ生徒

《言語文化部会　研究主題》

言語に親しみ，生活につなげる能力の育成

～「言葉への自覚」を高める指導の工夫～

《研究仮説》
・様々な言語活動の中で登場する語句の辞書的意味を正確に捉えるとともに，社会生活においてどのように活用していくとよいのか考える活動を設定すれば，言葉への自覚を高めることができる。
・古典における小学校での学習内容との系統性を踏まえて教材分析を行い，身近なこととのつながりを意識させる言語活動を設定すれば，古典に親しむ生徒を育成することができる。

《研究内容》
①「言葉への自覚」を高める指導計画の工夫
　（１）言葉の活用場面を明確にした言語活動の設定
　（２）学ぶ魅力・必然性のある教材開発
②「言葉への自覚」を高める指導援助の工夫
　（１）生徒が「主体的・対話的で深い学び」を実現するための指導の工夫
　（２）どの生徒も「言葉への自覚」を高め，言葉に親しませるための手立ての工夫
③評価の工夫
　（１）生徒自身が「言葉への自覚」の高まりを実感することができる場の位置付け

「『言葉への自覚』を高める」の定義
→辞書的な意味を基に根拠を明確にして、文脈に即して言葉を理解したり活用したりすること。

全国大会までの実践と、次期学習指導要領に書かれた３つの柱による指導事項の再整理を受け、今年度は上のような研究主題で実践を積み重ねてきた。特に、本部会のキーワードは「『言葉への自覚』を高める」である。次期学習指導要領にもあるように、いかに言葉を自覚的に用い、言語が思考・判断・表現するための知識・技能となり得るかを模索して指導を重ねてきた一年であった。昨年度まで積み重ねてきた古典領域にとどまらず、「言語」を武器として活用していけるために、様々な教材において実践を行った。

２　今年度の実践報告

【高山市立中山中学校　西岡 隆行 教諭】

〇単元名　「言葉をつなぐ」第１学年

〇教材名　「詩の世界」

《研究内容①》

第一時において、生徒が詩を初読した際に抱いた疑問点を交流し、そこから課題設定を行った。こうすることで、課題に必然性が生まれ、生徒自身がその疑問を解決するために、国語辞典を使って言葉を調べたり、詩の表現から新しい考えをもったりする姿が見られた。

また、単元終末の第四・五時では、自分が伝えたいことを表現するために、言葉を吟味して短い文章を書く活動を設定した。どんな言葉を使えば自分の思いがより伝わるのかを、辞書を用いて調べたり、仲間と考えたりすることで、言葉の面白さを感じ、自分の思いや考えを伝えることを肯定的に捉える様子が見られた。言葉への疑問からスタートし、教材を使って作者の言葉の使い方の意図を学び、自分の作品づくりに生かしていくというような指導計画の工夫を行った。

《研究内容②》

第一・二時で、詩の特徴や詩型など基本的な知識を学習し、それらを生かして詩の情景を想像したり、内容を読み取る方法（読み取りの技）を学習したりした。それにより、言葉が短く感覚的になってしまいがちな詩の読み取りに視点が生まれ、詩のもつ世界をより豊かに想像できるようになるのではないかと考えた。例えば、「魚と空」では、言語操作（比較、あるなし）を行うことに焦点を当て実践を行った。詩に出てくる言葉を他の言葉と比べたり、ない場合とで意味合いの違いを考えたりすることで、作者がその言葉を用いた理由に迫り、作者が表現したかった世界を想像することにつながるようにと意図した。

《研究内容③》

本実践では、第一時に三編全ての詩を読み、それぞれについての初発の感想を書く時間を設けた。その後、各単位時間で詩のよさを引き出す読み取りの方法について学び、一つ一つの表現にこだわって情景を想像し、世界観を広げながら詩を味わった。そして、読み取った後で、初発の感想と読み深めた内容を比較する活動を行った。そうすることで、当初の自分の考えが深まっていることを自覚する生徒の姿を生み出すことができた。単元を通して、一単位時間のまとめとして「何を書かせるか」ということを明確にしたことで、「言葉への自覚」の高まりを実感させる場として位置付けることができた。

【岐阜市立加納中学校　　河合　のぞみ 教諭】

〇単元名　「『徒然草』から紐解く兼好法師像」第３学年

〇教材名　「仁和寺にある法師―『徒然草』から～」

《研究内容①》

「兼好法師の『人やモノ』に対する見方・考え方から兼好法師像に迫る」という言語活動を設定した。「仁和寺にある法師」だけでなく「徒然草」に掲載されている他の話を取り上げることで、自分と兼好法師のものの見方や考え方の共通点や相違点をより深く知ることができ、自分が初めにもっていた兼好法師像の変容を実感することができた。

《研究内容②》

「神無月のころ」を取り上げた授業では、兼好法師の考えが表れている最後の一文にある「この木なからましかば」の「木」という言葉に着目し、「なぜ『柵』ではなく『木』がなければよいと考えているのだろうか。」という主発問を設定することで、「木」に着目した兼好法師のものの見方や考え方をより深く知ることができた。そうした手立てを通して、自分の考えの深まりを実感するとともに、作者である兼好法師との対話的な活動を仕組むことができた。

《研究内容③》

単位時間の終末において、本時の学びの深まりを自覚できるようなまとめを記述する活動を設定した。課題に対するまとめだけでなく、「仲間との交流を通して深まった考え」や「兼好法師像の変容について」と、段落を分けて記述し、単元を通して積み上げていくことで学習における自身の高まりを実感することができた。また、単元の終末では、「考えが深まった表現」に着目した振り返りをまとめることで、言葉の自覚の高まりを実感することにつなげることができた。

【下呂市立金山中学校　　熊﨑　智文 教諭】
〇単元名　「状況の中で」第３学年
〇教材名　「挨拶―原爆の写真によせて」

《研究内容①》
単元の導入として、被爆体験者の方の手紙を使い、意欲化を図った。危機的状況の中で安穏と暮らしている事実に、恐れを抱く作者の思いに共感しながら考えをもつことができた。それを受け、単元の出口では、平和に向けて自分自身ができることを書きまとめる活動を設定した。

《研究内容②》
冒頭の「あ」の有無、「焼けただれた顔」を「焼けた顔」と比較する等の言語操作を行い、その言葉が使われている意図を考えた。比較する中で、言葉の意味や使い方に対する認識を深め、作者の思いに迫ることができた。その際、国語辞典を活用し、辞書的意味を拠り所としながら比較する姿が見られた。

《研究内容③》
初発の感想と最後の振り返りを比較し、言語操作や辞書的意味を生かすことの有用性について考えさせた。そのことで、より深く作者の思いに迫ることができたと実感する生徒の姿が認められた。

３　今年度の成果と課題

〈成果〉
○「『言葉への自覚』を高める」という言葉の意味を定義付けたことで、生徒にどんな力を付けるべきなのかを明確にして授業を構想することができた。
○自己の考え等を思考・判断・表現するための言語であるという認識のもと授業を構想したことで、より主体的に、教材で学ぶ生徒の姿が増えた。

〈課題〉
●前述したように、言葉を根拠に思考していく生徒の姿は増えた。さらに、言葉を文脈に即して理解しているか、適切に活用することができているのかということを分析していく方途について、研究を進めていきたい。
●「言語」に焦点を置いて授業を行っていくことは、他領域でも行われていることである。そう考えた時に、他領域で研究していることと、本部会で研究していくべきこととはどう違うのか、さらに明確にしていく必要がある。

４　来年度の方向

日にち	会合名等	内　容	部会としての見通し
5月27日	・第１回　研究部総会 ◆第１回「言語文化部会」	○今年度の研究の見通し ○役割分担	・研究の方向を具現化するために、どんな実践を積み重ねたいかを考える。
8月初旬	「明日の授業を考える会」 in 飛騨地区	○授業相談	
	中学校国語科研究協議会 ◆第２回「言語文化部会」	○2021年度飛騨地区 県大会に向けて →研究の方向の確認・役割分担（授業者・実践発表者の決定）	・飛騨地区大会で、どんな授業を公開するのか見当をつける。
8月19日	夏季研修会 in ぎふメディアコスモス	○講演拝聴	※可能なら、見当をつけた授業を実践する。
12月下旬	「明日の授業を考える会」	○授業相談	
2月17日	・第２回　研究部総会 ◆第３回「言語文化部会」	○本年度の成果と課題をまとめ，2020年度の方向を決定 ○「中国研ＨＰを活用した情報共有」の練り合わせ ○実践発表を通して，本年度の歩みを県下に発表	・実践の成果と課題を交流する。（飛騨地区大会に向けての授業の方向性の決定） ・飛騨地区大会に向けて、部会としての実践発表について検討する。

※日程や場所については、変更になる可能性があります。